

『猿』

作

秋之

桜子

■配役■ (登場順)

朴／ボクちゃん (十七歳) カフェ「エピグラフ」に住んでいる少年・朝鮮人

仁科 三郎 (三十二歳) 編集者

泉 慶介 (三十八歳) 作家

香川 悟 (二十歳) 作家志望

ツネ子／ツネちゃん (二十五歳) カフェ「エピグラフ」に住んでいる女給

高岡 総一郎 (三十四歳) 「東(あずま)」新聞の社主

手塚 沙紀 (三十五歳) 手塚の妻

時江 (三十六歳) カフェ「エピグラフ」のママ

手塚 修造 (三十八歳) 流行作家

一幕 第二場

昭和十二年八月十九日 夏——夕刻

古ぼけた小さなカフェー『エビグラフ』
ランプの灯の下、店内がぼんやりと浮かぶ

小さなカウンター（その奥に小部屋があるが、表からは見えない）
テーブルが二つとそのまわりに形の違う使い古された椅子
古ぼけた寝椅子——そして、蓄音機が置かれている

若い男—朴（彼は皆にボクちゃんと呼ばれている）が店の床をふいている
朴は、つと立ち上がる——夕立の匂いを感じたのである

彼は空き缶や花瓶などを出し、雨水が落ちるであろう場所にそれらを置く

——やがて

小さな雨音がやがて大きな雨音にかわり、雨の粒が一つ二つと、朴が置いた
ものたちの中へと落ち始めると、彼は丁寧に入れ物の位置を調整する

二階から、女のあえぎ声

朴はチラリと二階を見るがまた床を拭き始める

ドアの音がカランカランとして

二人の男が駆け込んでくる——仁科と泉である

泉 いや、まいったまいった

仁科 急でしたね、あんなに晴れていたって言うのに

泉 あ、ボクちゃん、なにか、拭くものないかしら

朴は手拭をもってきて二人に渡す

仁科 しかし泉さん、やっぱり『思想』は『言葉』にすべきなんです、僕はそう
思う

泉 でも『言葉』にしたら消されてしまうよ、もっとうまくやらなくちゃ

仁科 誰も書こうとしないからダメになっちまってるんですよ日本は

泉 そうかしら

仁科 泉さんもそろそろ何かやりませんか

泉 …うん、そうなんだがね

仁科 突然、やめちゃってどうしたんです？

泉 うん

仁科 あの老大家に酷評されたからですか？ 泉さん、アレがわざわざ新聞でけなすのはその書き手の才を認めてるってコトくらいご存知でしょう？

と、二階から、またあえぎ声

泉と仁科、しばしあえぎ声に聞き入って

仁科 ツネちゃんだな

泉 お猿さんごっこか

仁科 (朴に) 手塚さん？

朴、首をふる

二人、耳を濟ませると今度は男のあえぐ声が聞こえる

泉 声は出さんだろう、あの人は

仁科 そうですね

泉はカウンターに置かれている新聞を読み始める

仁科 じゃ、誰なんだろう…、あれ(朴に) 時江さんは？

朴 (首をふる)

仁科 いないのかい？ へえ、どしたんだろ

泉 珍しいね

仁科 二人でお留守番かい？

朴 (うなづく)

泉 しかし、やってるな

仁科 (二階のことかと思ひ) そりゃ

泉、仁科に新聞を見せる

仁科 ああ、支那ですか

泉 勝利勝利と騒いでちつとも終える気配がない。全土を掌握する気になっちゃったんだなヤツラ

仁科 いや、いくらなんでもそれはないでしょう。第一あの広い国をどうやって

泉 満州のように鉄道を押さえてしまえばいいなんて思ってるんだろうよ
仁科 ……まさか

泉 これが、あの若き将校さんたちの願った世界だったのかしら
仁科 ……

泉 今となって思えばあれはトンマな事件だね
仁科 トンマって、泉さん

泉 だってトンマだろ。あなたのためにと命をはって決起したのに、なんのことはない、当のお上の逆鱗に触れちまってけっく死刑だよ。トンマと言わなくてアレをなんとという？ ま、滑稽くらいにしてやってもいいけれど。育ちのいい青年たちの滑稽な恋の花、散るだ

仁科 そうかもしれません、けれど

泉 しかも阿部定事件の方が有名なんだからな、今じゃ

仁科 泉さん、あんなものと一緒にしちゃあ、将校さんたち可愛そうだ

泉 そうかしら、大衆は正直だよ。実際彼らの死よりも、情夫のイチモツ切ったお定さんの方がずっと人気があるじゃないか

仁科 じゃあなたは彼らの行為がまったくの無駄だったとおっしゃるんですか

泉 では仁科くん。226以降、何かよくなったかい？ よくなったことが一つでもあるならあげてご覧よ

仁科 それは

泉 なってやしないんだよ。何一つ、なってやしないんだ。と言うより、あれでますます軍部は力をもった。曲がった方に力を持った。いずれ日本は大変なことになる。その口火を切ってしまったのがあの将校さんたちさ

仁科 ……

泉 支那で、いや、きっと本土でも、沢山死ぬよ、きっと

仁科 泉さん、それを書いてくださいよ

泉 いや、これは文学じゃないよ。「運命」の話なんだから

仁科 「運命」か。最近のはやりですね。どの先生方も、きな臭くなってからこっち、運命、運命と、なにかと言えば「運命」のセイにする。そうすりゃ、角は立たんとね。真実に目をそらしていても、バレやしないとね

泉 ……

仁科 せめて、泉さんたちがね。赤子みたいに、怖い、怖いよって、素直に書いて下されば、どれだけわかりいいか。そうすりゃ、僕ら平民にだって、戦争の怖さがわかるんだ

泉 仁科くん、君そういうの、あまり大きな声で言わない方がいいよ

仁科 泉さんだって、今、言ってるんじゃないですか

泉 それこそ、僕のは「運命」の話で、君のはしごく具体的すぎる。具体的なのはわかりやすさと繋がるからね、危ないよ

仁科 なんだか、ずるいなあ

泉 ……

仁科 あゝあ、俺に書く才があったらなあ、出し惜しみなんてせずになんだったか
んだって書いてやるのに

泉 僕は別に、出し惜しみしているわけじゃないさ

仁科 そうかなあ

泉 ただ、書けなくなっちゃった、それだけだよ

仁科 ……でもね泉さん。僕はやっぱり結果がどうであれ、行動した彼らは尊いと
思う、いや、思いたいんですよ

泉 君は、手塚に何か書かそうとしているの？

仁科 いえ、まだ具体的には

泉 そう

仁科 でもあの両性具備（両性具有）のような作風ならいけるかと思うことはあり
ます。あの人のペンの力で、何か時代に一石を投じるような

泉 ……

仁科 しかしでも泉さん、今度の手塚さんのは、ちょっと……

突然、若い男の絶叫

泉 やはり、手塚ではなかったね

仁科 （苦笑）ええ

仁科は二階を少しのぞく

ツネ子（声）ボクちゃんくくくっ

朴 ハイッ

朴は雑巾を丁寧にしぼりカウンターの裏にしまってから

きれいな手拭を手にとって二階へと向かう

入れ違いに汗をびっしょりかいた上半身裸の若い男——香川が

二階から転がるように走り降りてきて、朴とぶつかりそうになる

香川 あ、君、大丈夫かい？

朴は、二階に上がろうとする

香川 あの、ダメだよ

朴 ……
香川 今はダメなんだ

朴 ……
香川 いいかい、あのね

仁科 その子はいいんだよ、香川くん

香川、仁科をみて驚く

香川 わ、仁科さん

仁科 ボクちゃんね、ツネちゃんとしか口を聞かないんだ
香川 え？ あ…

朴、二階へとあがる

仁科 君だったのか、そうか、君もすみにおけないねえ

香川、慌てて乱れている服装を直そうと必死になる

香川 いえあの、これは、あの僕、ええとあの、ええと、すみません

仁科 お猿さんごっこだろ、ツネちゃんと
香川 え、なんでそれ

仁科 あの子にとっちゃ、僕らはみな、上野のサル山のおサルさんなんだ
泉 しかも発情期のね

香川 あっ、泉さん

香川、ますます焦る

泉 前に会ったことあるかしら？ 僕、君のこと存じてないのだけれど

香川 いえ、僕が一方的にです。手塚さんとよく一緒におられるから…、あっ『見落とした空気』読みました

泉 いやあれは別に君、読まなくてもいいよ
（泉に）この人、香川くん。このとこ手塚さんに御執心なんですよ

香川 君も書くの？
はい。いえ、あの…、まだまだですが、はい。

仁科 そういや、手塚さんに見せたのかい？ なんか短い書けたとか言ってた
じゃないか

香川 見せたんです。見せたから、あの、その感想を伺おうと。あのそれで、こ

仁科　　ここにきて、それで、あの、それで待ってたら、ツネ子さんが、つまらないから二階で遊ぼうって。でも僕、まさか、それが…
香川　お猿さんごっこはしらなかった？
仁科　はい、はい、そうなんです、はい、はい……
泉　　ま、君さ、ちよつと落ち着くがいいさ。泉さん？
仁科　うん、頂こう

仁科、勝手知ったるといふ風にカウンターに行き、三人分のウイスキーを小さなグラスに注ぐ

仁科　ほら

香川　いいんですか？

仁科　いいさ、この店のおごりだ

香川、グイッと一気に飲む

香川　あの、もう一杯、いいですか？

仁科　いいけど、それは払えよ

香川　あ、そうか

泉　　飲みなさい。次のは僕が払うから

香川　ありがとうございます

香川、今度は自分でウイスキーを多めに注ぐ

泉と仁科はその様子がおかしい

香川、グイッと飲み干し、やっつと一息つく

泉　　災難だったな、と、言うべきかな

仁科　災難なもんか（香川に）ねえ

香川、何も言えず、モジモジしている

泉　　君

香川　あ、はい

泉　　もしかして初めてだったの？

香川、またまた赤くなる

泉
なんだ、ヘエそうなの、それは切ないねえ
仁科
いや僕は、初めてがツネちゃんというのはとてもいい選択肢だと思うな。あれはいい子だもの……あれは天使さ
ツネ子(声)
はいしどうどう、はいどうどう

中原淳一の描く少女画のような可憐な女——ツネ子が朴にエプロンを着せ、腰紐を馬の手綱のように口にくわえさせ出でくる

ツネ子
パカラツ、パカラツ、パカラツ、パカラツ（仁科と泉に気付き）あら、いらつしやい（香川をみて）あつ、そこにいたな敵兵めつ、ツネ子がお仕置きしてやる、ボクちゃん、敵陣につっこめー

朴
ハイッ
仁科
ツネちゃん、どうしたの
ツネ子
（香川を指して）このヒト、急に大きな声出すんだもん。ツネ子びっくりして、ほら、舌かんじやったのよ

仁科と泉、ツネ子の舌を覗き込み

仁科と泉
あゝ
香川
だって、ツネ子さん、あれは、あれは
ツネ子
問答無用。お仕置きよ、ボクちゃん、ホウキとラッパとついで
朴
ハイッ

朴は蓄音機のラッパ部分を取り外しツネ子に持たせ、奥から箒を持ってくる

ツネ子
兵につぐー 今からでもおそくはないー
朴
兵につぐー 今からでもおそくはないー
ツネ子
突撃くくくつ

朴とツネ子は「兵につぐ」「今からでもおそくはない、原隊へ帰れ」「お前たちの親兄弟は泣いておるぞ」といいながら香川をおいかる

香川
おい、よせよ、よせたら、仁科さん、助けてください
仁科
まあまあ、そのくらいで許しておあげよ、ツネちゃん
ツネ子
仁科さんの頼みでもダメ。舌かんじやったんだものツネ子痛いんだもの
仁科
香川くんのアレはね、気持ちいいから出たんだよ
ツネ子
アレってなによ

仁科 あの声がさ

ツネ子 難しいお話、ツネ子、きらい

仁科 いや全然、難しくないよ、自然の摂理さ

ツネ子 ほらまた。セツリってなによ、すぐツネ子をキチガイにして

泉 だからさ、ツネちゃんのをしてくれたことがね、とっつても気持ちよかったか

泉 ら、この人（香川をさして）叫んだってことさ

ツネ子 気持ちいいと叫ぶの？

泉 そうさ

ツネ子 （考えて）でも、センセイたちは叫びやあしないじゃない

泉 それは……まあ、そうだな

ツネ子 センセイたちは気持ちよくないの？

泉 そんなことはない、そんなことはないけど……おい、仁科くん

仁科 イヤですよ、こっちに投げちゃ

ツネ子、香川に近づいて

ツネ子 もう一回叫んでごらんな「あ〜〜〜」ってさ

香川 そんな、無理ですよ

ツネ子、香川をさわる

ツネ子 よう、ほら、ようお

仁科 ツネちゃん、この人はね、ツネちゃんが初めてだったんだぜ

香川 仁科さんっ

ツネ子 初めて？

仁科 ツネちゃんがね。記念すべき初めての女の人のさ

ツネ子 初めてのオナナのヒト？

仁科 そうさ

ツネ子 ふくん。それって良いコトなの？

仁科 良いことだよ、とっつても、ねえ香川くん

香川、小さくうなづく

ツネ子 ふくん（泉に）良いコトなんだ

泉 良いことさ

ツネ子 良いコトなら許してやるか（ふと、気付き）あらやだわ、私、働かなくっちゃ、ボクちゃん、エプロン

朴はツネ子にエプロンをつけてやる
エプロンをつけたツネ子、しなを作って笑いかける

ツネ子 センセイさんたち、お酒、飲んでつてよう

仁科 (苦笑) もう、頂いてるよ

ツネ子 な〜んだ、そうなの？ つまらない。ボクちゃん、お着替え

朴 ハイッ

ツネ子、奥に着替えに入る——彼女は着せ替え人形のように一日に何度も洋服を着替える

泉 よく統制されてるな

仁科 ツネちゃんの隊は、ピカイチ強いだろうね

ツネ子の歌声が聞こえる

『ダイナ』

♪おお ダイナ 私の恋人 胸にえがくはうるわしき姿

おお 君よ 紅き唇 われにささやけ 愛の言葉を

ああ 夜毎 君の瞳 麗しく 想い狂わしく

おお、ダイナ 許せよくちづけ

わが胸ふるえる 私のダイナ

ツネ子は繰り返し歌っている

仁科 君、徴兵検査は？

香川 4月に

仁科 入れられたろ、尻に

香川 (頷く)

仁科 あれ、本当になんとかならんのかな、素っ裸にされて並ばされた上に…
服従の精神を養うためさ。尻に指つつこまれたら誰でも「参りました」となるだろ

仁科 ええ

泉 加えて平等の精神もね。学生も百姓も良家のお坊ちやまもみな尻仲間になるからな。(香川に) で、君はなんだったの？

香川 (いばって) 甲種です

仁科と泉、顔を見合わせる

仁科

それはおめでとう

香川

ありがとうございますっ

泉

来年には入隊か

香川

はい

仁科

結構、キツイぜ「担銃（になえつつ）」「立銃（たてつつ）」

仁科、やってみせる

香川

お二人は、予備ですか

仁科

うん

泉

ああ

香川

行かれたんですか？ 戦場へは

仁科

いや、どこにも行かず、予備さ

香川

どんなお気持ちですか？ 戦地にも行かないで男として一生を終えるという

のは

仁科と泉、苦笑する

泉

行かんとは限らんよ

香川

そうなんですか？

泉

このまま軍部が突っ走れば、国家総動員なんてことにもなるだろうし

香川

（笑）まさか

泉

いや、まさかはないよ、どんなコトにでもね

仁科

しかしまあ、世情を知るためには一度は戦地に出向くべきなのかもしれないませ

んね

泉

君に行ってもらっちゃあ、僕らが困るよ

仁科

そんなことはないでしょう

泉

いや困るよ。誰が売込みをしてくれるんだい？ 僕らは生活破綻者ばかりだ

からね。お守りをしてもらわなくちゃだめなんだ

仁科

ま、それはそうですな

泉、また新聞を読み出す

仁科

でも香川くん、来年入隊ならなおのこと、今日のことは良かったよ

香川

……え？

仁科 尻の穴だけの経験で入隊した日には碌なことにはならんからね
泉 (苦笑) 君はエログロだなあ

男が一人、入ってくる——高岡である
今までの、どの男よりも身なりがよい
仁科と泉、立ち上がり頭を下げる

仁科 高岡さん

高岡 やあ

泉 どうも

高岡 いや、しかし蒸すね

高岡、勝手知ったるといふ風に水を汲み飲む

仁科 (酒のグラスを持ち上げ) コレじゃなくていいんですか？

高岡 まだ仕事がね

泉 やはり支那ですか？

高岡 ええ

泉 本当はどうなんです戦況は

高岡 まあ、いずれわかりますよ

ツネ子、着替えて出てきて、高岡を見つける

ツネ子 わくわく、高岡さん、わくわく

ツネ子、岡にすがりつく

ツネ子 なんだよう。ちつともきてくれやしなないじゃないかよう

高岡 悪い悪い、社の方がね、忙しかったから

ツネ子 もう泣いちゃうもの。ツネ子、泣いちゃうもの

高岡 泣いちゃうやだな、泣かないでおくれよ

ツネ子 じゃあ、いっぱいいっぱい遊んでね

高岡 わかったよ、いっぱいいっぱい遊ぶから、大人しくしておいで

ツネ子 そういつて、すぐ忘れるくせに

高岡 忘れるわけないさ。こんな可愛いキチガイツネちゃんを

ツネ子 またそれ。ツネ子、キチガイなんかじゃないもん

高岡はツネ子をやさしく抱きしめる。と、ツネ子はすぐに大人しくなる
——これは、二人の日常の「儀式」である

高岡 手塚さんは？

仁科 高岡さんも呼ばれたんですか？

高岡 ええ、電報で

泉と仁科、顔を見合す

高岡 じゃあ、あなたたちも？

泉 ええ

高岡 (ツネ子に) あっちにいておいで

ツネ子頷き、朴と奥の部屋へと去る

仁科 なんだか大仰ですね手塚さん、電報なんぞ使って。しかも当の本人はちっと

も姿を見せやしない

高岡 二階じゃないかしら？ このとこよく時ちゃんと飲んでいるから

仁科 いえそれが二階にいたのはツネちゃんはこの青年で

香川、ペコリと頭を下げる

仁科 すみません、お忙しい中、ワザワザ来て頂いたというのに…

高岡 いや、ちようど良かった。これお返しするよ

高岡、机の上に風呂敷に包まれた原稿の束を無造作に置き

香川をジロリと見る

香川 あの、じゃ、僕は、今日はこれで

仁科 手塚さんが来たら、君の原稿のこと聞いてみてあげるよ

香川 お願いします

香川、去る

高岡 あれですか、最近、手塚くんにくっついてる坊やは

泉 もう、坊やじゃありませんよ

高岡 なぜ？

泉 ツネちゃんに奪われてしまったんですよ、貞操を
高岡 なんだ、そうなの。じゃあお祝いしてあげるんだね

仁科、机の上の風呂敷包みをひろげ

仁科 これ、どう思われました？

高岡 これを出したら、あの人は終わってしまうね

仁科 やはり

高岡 うん、ひどすぎる

仁科 泉さん、手塚さんトコ新しく書生でも雇ったんですか？

泉 え？

仁科 いつも奥さんが清書しているのに、今回は違ったから

泉 ……

高岡 しかしでもこれで清書と言えるのかしら、汚いし脱字は多いし
泉 ちよつといいですか？

高岡 ええ

高岡、泉に原稿を渡す

仁科 最近、あの人、ノッっていたのにどうしたんでしょう

高岡 ま、こういうこともあるよ。だから今日、皆を集めたんだろう

泉 ……

高岡 何か意見がほしいのだよ、きっと

仁科 でも高岡さん、いくら求められてもこれでは意見の言いようがない

高岡 (苦笑) まあ、確かにね

仁科 手塚さんもなあ、書けないなら書けないと言ってくれたら良かったのに

高岡 ええ

泉 ……これはひどいね

仁科 ね、のっけからわかるでしょう？

高岡 しかし、手塚さんのが載せられないとなると、次の号が困るな

仁科 そうだ(泉に) 何かないですか？

泉 ……

仁科 短いものでもいいんです(高岡に) ねえ

高岡 ええ

仁科 やりましょうよ泉さん、いい機会じゃないですか

泉 いや、無理です

仁科 どうして

泉 僕は、今、何もありません
仁科 泉さん
泉 僕は、今、書く勇気もありません

女——沙紀が入ってくる。手には風呂敷
沙紀、高岡たちがいることに少し驚き、お辞儀をする

仁科 沙紀さん、なぜこんな所に？

沙紀 手塚から電報がきて、ここで待っている

泉 手塚、あなたにも電報を？

沙紀 ……はい

泉 ……そうですか

仁科 私たちもみな、手塚さんに呼ばれてここに集まったんですよ

沙紀 それで手塚は

仁科 いや、ここにはまだ

ツネ子と朴出てくる

ツネ子 あら、いらっしやあい、お一人？ お酒のんでつてよう

仁科 ツネちゃん、この人はね、手塚さんの奥さんだよ

ツネ子 ふくん、あなた、おおくさんなの？

沙紀 ……

高岡 紹介して頂けないかな？ 私にも

仁科 あ、すみません。沙紀さん、この方が東（あずま）新聞の社主、高岡総一郎さん

沙紀 いつも、手塚がお世話になっております

高岡 そうですか、あなたが

ツネ子、沙紀にまわりついて

ツネ子 おおくさん

沙紀 ……

ツネ子 おおくさん

高岡 こら、ツネ子、よしなさい

ツネ子 （ふくれて）ふんだ、つまらない

ツネ子はプリプリしながらカウンターに座り、ダイナを歌いだす

第二場

高岡
すみません。あの子は少し……
沙紀
いえ

香川が飛び込んでくる

香川
あの、あのっ、あのっ
なんだ、びっくりしたなあ、忘れ物でもしたのかい？

香川
あのっ、あの、あのっ
なんだい、どうしたい

香川
手塚さんが、手塚さんが
手塚さんがどうしたの

仁科
その待ちが騒ぎになっているから、何かとのぞいてみたら
だからなに
手塚さんが、時江さんと心中を

沙紀、倒れる

仁科
沙紀さんっ
泉
沙紀さん

ツネ子は歌を歌い続けている

暗転

——その夜

香川と仁科が将棋を指している

朴は掃除をし、ツネ子は歌っている

『忘れちゃいやよ』（※歌は全て歌わなくても可・以下ほかの曲も同じ）

♪月が鏡であったなら 恋しあなたの面影を 夜毎うつしてみようもの

こんな気持ちでいる私 ねえ 忘れちゃいやよ 忘れないでね

昼は幻 夜は夢 あなたばかりにこの胸の 熱い血潮がさわぐのよ

こんな気持ちでいる私 ねえ 忘れちゃいやよ 忘れないでね

風に情があつたなら 遠いあなたのその胸に

燃える思いを送ろうもの

こんな気持ちでいる私 ねえ 忘れちゃいやよ 忘れないでね

淡い夢なら消えましょに こがれこがれた恋の灯が

なんで消えましょ消されましょ

こんな気持ちでいる私 ねえ 忘れちゃいやよ 忘れないでね

ツネ子は歌いながら、履いていた下駄を足で飛ばして遊んでいる

朴はそれを拾っては丁寧に履かせてやる——この遊びは繰り返す

仁科はぼんやりとそれを見ている

仁科さんの番ですよ

え？

ほら

……

大丈夫ですか？

ああ、なんだ、え？ おい、そりゃないよ、これ、ここに指しちゃうの？

はい、もちろん

君は真面目すぎるよ

勝負ですからね

もっと自堕落でないといけない

仁科さん、あなたもデカダンなんですか？

僕は違うよ。僕はエログロさ

泉さんは？

香川
仁科
香川
仁科
香川
仁科
香川
仁科
香川
仁科
香川
仁科
香川
仁科
香川
仁科

仁科 あの人と違ふだろうよ、あれでいてあの人はアンニユイだから
香川 じゃ、真のデカダンは手塚さんだけですか
仁科 そうかな、そうかしら……（駒を見ながら）コレがいけないなあ

仁科は将棋の手を考えている

香川 大事なくてよかったですね、手塚さんも時江さんも
仁科 ああ。ほっとした

香川 仁科さんは、よくよく手塚さんが好きなんですね
仁科 なんだい、やぶからぼうに
香川 あなたはちっともエログロじゃないですよ、むしろロマンチストです
仁科 よせやい

香川 抱きついて泣いてらっしゃったじゃないですか
仁科 それはアレが……、一瞬死んでいるのかと思っただから

香川 あの瞬間、僕はお二人に嫉妬しました。編集者と作家はこんな風に蜜月でな
くてはならん、こうでなくては良いものは生まれないんだとね

仁科 世辞をいうなら、これ、元に戻せないかな
香川 いえ、これはこれ。あれはあれです
仁科 チエ、硬いなあ

香川 でも、見事な大イビキでしたね

仁科 ひどかったね全く。抱きついたらとたん「グオオオ〜」だけ（苦笑）可愛い看護婦には笑われるし、自分が哀れになったよ。だからうちやっけて帰ってきたんだ。ま、泉さんもいたしね

香川 泉さん、なんだか、ずっと神秘的な顔してらした

仁科 そりゃあそうだろ、親友なんだからさ

香川 しかし、なぜですか？

仁科 なに

香川 なぜ、手塚さんは死のうとなさったのですか？ あんなに売れているのに
そんなものわからんさ。あの人の頭の中などわかるわけがない

香川 ……遺書にはなんと書いてあったのですか

仁科 それがなかったんだよ

香川 え？

仁科 だからますますわからんのか。ま、それがあのヒトの面白いところかな。
元気になったら、イロイロ突っついてやる

ツネ子

よおお〜

ツネ子は下駄を香川の近くに飛ばす

香川、朴が拾わないかと思うが朴は動かない

香川、仕方なく下駄を拾いツネ子へと持っていく

ツネ子は朴にしていたのと同じように足を差し出す

香川、困るが、不器用に下駄を履かせてやる

すると、ツネ子はカウンターから下り、まるでキスをするかのように香川に

近づき、香川、緊張する

ツネ子、かわいい笑い声をたて、奥の部屋へと去る

仁科 (笑) 気に入られたね

香川 ……はあ

間

香川 ……ずいぶん印象が違ったな

仁科 なに？

香川 東新聞の、高岡さん

仁科 君、会うの初めてかい？

香川 はい新聞の写真でしか

仁科 満州の時のあれか。またあの写真は特別いかめしいからな

香川 ええ

仁科 で、実際会ってみると『なんだ、ずいぶんと地味な風だ』と？

香川 ……

仁科 失礼だぞ君

香川 僕は何も……

仁科 いや実は僕もさ、最初に会った時、そう思ったよ

香川 なんだ

仁科 そりゃそうさ『東新聞、お家騒動』の主人公だもの（弁士調で）「先代の遺言

により、第三代目社主に任命されたのは、なんとなんとこの妾の子っ」

香川 学校でみな、新聞読んでは大興奮していました

仁科 「体制に負けるな、妾の子」だろ？

香川 はい

仁科 任を返上すべきと本家筋が育ちの悪さを書き立てたけれど（苦笑）ヤツラ
庶民を理解していなかったね

香川 高岡さんは自分に向けられた罵詈雑言を否定することなく傍観なさって
いた。そして突然「こんなことで戦うのなら私はお国のために戦います」
と志願して戦地へ。あれにはシビレたなあ

仁科 センセーショナルだったね
香川 ハイッ

仁科 しかも「名誉の負傷」で勲章もらって帰ってきちゃったもんだから、金使っ
て兵役逃れをしていた本家のお坊ちゃんたち、何にも言えなくなっちゃった
社主に就任された時は、みんなで万歳三唱しました

仁科 (苦笑) そうなの

香川 だって、僕らのヒーローでしたから

仁科 ま、その流れである写真じゃあ『日本男児然』とした男を想像するよな
香川 それと……

香川、言おうとした言葉をひっこめる

仁科 なに

香川 いえ、いいです

仁科 なんだよ

香川 いえあの…、もう少し明るい感じの方かと思っていたものだから
仁科 え？

香川 なんだか、僕、ゾクツとしちゃたんです。あのヒトに見られた時

仁科 ……

香川 なんだか、怖いなって

仁科 そりゃ新聞作ってるんだぜ、怖くなきゃダメだろ

香川 ……そうか

仁科 そうさ

香川 時江さんとはどういうご関係なんですか？ ずいぶん親密そうにされていた
けれど

仁科 世に言うパトロンだよ

香川 ……へえ

仁科 僕も詳しくは知らないけれど、時江さんが昔働いていた店が、高岡さんの亡
くなつた母上もいらしたトコだとかで…

香川 それじゃあまりその…

仁科 うん、そう、あまりよろしくない場所さ

ツネ子が新しい洋服に着替えて出てくる

朴に鏡を持たせ洋服のチェックをしている

気に入らないらしく、また、着替えに奥へと去る

時江さんのご親戚か何かですか？ ツネ子さんとボクちゃんは

仁科 いや、高岡さんがどっかから拾って来て、ここに置いてるって聞いたよ

香川 あの二人は、……お付き合いをしているんですか？

仁科 (噴出して) 君、焼いてるの？

香川 (慌てて) いえ、あの、そんな、いえ……

仁科 ツネちゃんはね、ボクちゃんとだけははしないんだ。

香川 え？

仁科 ツネちゃんはボクちゃんとだけはプラトニックなんだぜ

香川 何故ですか？

仁科 さあ…… (歌うように) どうしてだろうねえ♪ おっ！ これをどうだっ

香川 (すかさず) 王手

仁科 えっ？

香川 王手です

仁科 なえ？

香川 王手だからです

仁科 でもどうしてこいつがここに？ 君、いつの間に

香川 仁科さんが、集中を欠いていたからですよ

仁科 ……君がいろいろ、聞いてくるから…… (盤を見て) なんじゃこら

香川 仁科さんって、真っ直ぐな方ですね

仁科 え？

香川 将棋の指し方を見るとその人の性格がわかるんです

ツネ子、また出てきて洋服をチェック

今度は気に入ったらしく、朴を台にしてまたカウンターへと座り

「忘れちゃいやよ」を歌う

仁科、香川をマジマジと見て

仁科 本当に強かったんだね、君

香川 だから言ったじゃないですか、僕、すごく強いですよって

仁科 だってそうは見えないんだもの

香川 意外と騙されやすいんですね

仁科 怒るぞ

香川 すみません

仁科、また考え込む

香川 仁科さんは手塚さんのどの作品が一番好きですか？

仁科 そうだな、どれも好きだけどここ最近のものは特に好きだね

香川 ごちそうさま

仁科 参りました

香川 ようし、ツネ子さん、うなぎ特上おごります

ツネ子 わーい

仁科 しかしすまん、今日は無理だ

香川 え？ それはどういう……？

仁科 負けるとはこれっぽっちも思っていなかったものだから、持ち合わせがないんだよ

香川 ひどいなあ、賭け将棋をやるうと言い出したのは仁科さんじゃないですか君、強すぎるんだもの

仁科 うなぎ、うなぎ

ツネ子 ツネちゃん、ごめん。うなぎ今日はなしだ

ツネ子 えくくく、ひどくくく。ボクちゃん、仁科さん、ひどいよ

朴 ようしやないですね

みな、驚く

仁科 そんな言葉どこで覚えたの？

朴 ……

仁科 ツネちゃんが教えてあげたの？

ツネ子、首をふる

ツネ子 ようしやないの？

朴 ようしやないです

ツネ子、意味がわからず、ポカンとしている

仁科 そうだよボクちゃん、ようしやないんだ（香川をさして）このヒトは

香川 （苦笑）人聞きわるいなあ

香川は将棋盤を片付ける

仁科、カウンターに置きっぱなしの二つの風呂敷に気付く

仁科 これ誰のだろう

香川 一つは手塚さんなのでしょう

仁科 そうなんだけど、あれ？ この風呂敷、確か……

ツネ子 それ、おおくさんの

仁科 沙紀さんの？
ツネ子 そうよ、ツネ子がひろってあげたの
仁科 沙紀さん、まだ二階で寝ているんだよね
ツネ子 そうよ

仁科、新しい風呂敷をあけると、そこには原稿用紙の束
仁科、それを一目みてホツとする

仁科 ……よかった
香川 仁科さん？
仁科 そうだ。ねえ、やはりみんなでうなぎ行っておいで
ツネ子 わくわくいっ
香川 いいんですか？
仁科 ちよつとばかり歩くが二丁目のうなぎ屋、わかるかい？
香川 ああ、魚屋の隣の
仁科 あそこならツケが聞くから
香川 なんだ仁科さん、それを始めっから……
仁科 (原稿を読んでいる)
香川 仁科さん？
仁科 いや、うん、行っておいで。ほら、ツネちゃん、ボクちゃんも
ツネ子 でも、お留守番……
仁科 大丈夫だよ、僕がしておいてあげるから。追っつけみんな帰ってくるだろう
香川 じゃ、遠慮なく
仁科 うん、行っておいで、早く行かないとしまっちゃうよ
ツネ子 わくわくいっ

ツネ子、エプロンを脱ごうとして、ポケットに手紙が入っていることを思い
出す

ツネ子 あ、これ、忘れてた
仁科 なに？
ツネ子 これ仁科さんに

ツネ子の手にはぐちゃぐちゃになった封筒

仁科 (苦笑) ありがとう

ツネ子
香川

うん
じゃ、行ってきます

ツネ子と朴は「うなぎ、うなぎ」と歌いながら、香川と去っていく
仁科、もう一度、原稿をきちんと確認する

仁科

……よかった。手塚さん、ちゃんとしたの書いてる

仁科、風呂敷を包みなおして

仁科

しかし人騒がせだなまったく。冗談ポイだぜ（考えて）高岡さんまだ時江さんのところかしら

仁科、ツネ子から受け取ったグチャグチャになった封筒を広げてみる。
——と、表に手塚の字で「遺書」と書いてある

仁科

……遺書（苦笑）なんだツネちゃんが持ってたのか、ツネちゃんに託しちゃいけないよ、手塚さん

仁科、編集者の好奇心に負け、手塚の遺書を読む——長い間

仁科

…嘘だ

仁科、包みなおした風呂敷を乱暴に広げ、原稿を取り出す
彼は原稿を読み、そしてまた手紙を読む

やがて、原稿を破こうとするのだが——彼には破けない

仁科

そうか、冗談だよな、これも

仁科、二階を見上げる

仁科

（つぶやく）冗談ですよね、悪い冗談ですよね、沙紀さん

原稿用紙を握り締め、仁科は二階へと上がっていく

雨が降る

二階から人がぶつかるとかのような音が聞こえる
——時が過ぎていく

ワイシャツを手に持った仁科がフラフラと降りてくる
彼は、呆然としている
やがてお酒を飲むと、彼は子供のようになり泣き出す
カウンターに頭を何度もぶちつけ、やがてつつぷす

ドアの音

時江 (声) ただいまゝ

女——時江が高岡と泉に抱えられ入ってくる

時江はカウンターに突っ伏している仁科をチラリと見る

泉 ……仁科くん？

仁科 ……

君、今まで飲んだの？

時江が少しよろめくので、高岡は長椅子に座らせる

高岡 何もこんな時間に出なくなっちゃっていいものを……。泉さんすみません。手塚さんを見てらしたのに

泉 いや、ただイビキをかいて寝ているだけですからヤツは

時江 病院なんて、あとイットキだっていられない、死臭がするもの

高岡 (苦笑) 死にたかったんじゃないのかい？

時江 うるさい

高岡 まだ抜けないのだろう、クスリ

時江 こんなものには比べれば甘ちゃんよ。手塚さんったら、全然たいしたクスリ持ってやしないんだもの、あれで死のうなんてよく言えたわ

高岡 その道のプロは語るか

時江 あの先生、見かけによらず真面目先生だったのよ

仁科 お前っ

時江 なに？

仁科 お前がそそのかして手塚さんを

時江 違うわよ

仁科 手塚さんは、手塚さんは

時江を殴ろうとする仁科

泉 仁科くん

高岡 君、落ち着きなさい

仁科を高岡と泉が止め、仁科はへなへなど座りこむ

時江 あのねえ「死んでくれ」っていったのはあの人よ

仁科 ……

高岡 そうなの？

時江 やあね、あなたまで

高岡 ごめん

時江 その隅っこでさ、お酒ガバガバ飲みながら「もうダメだ、オシマイだ」って、子供みたいに泣きながら駄々こねててさ、ちっとも収まりやしないから、私、ヨシヨシって頭なでてあげたのよ

仁科 ……

時江 そしたらあの人、急に目をキラキラさせて、私の手をこうギュッってつかんで「時ちゃん、一緒に死んでくれるかい？」

高岡 (苦笑) ポエムだね

時江 私もさ、なんでウンって言っちゃったんだかわかんないんだけど、でもいざそうと決まったら、人って楽しくなるものね、二人してうくくんとはしゃいでさ、新婚の夫婦みたいにさしつさされっ…、シアワセだったなあ

仁科 黙れっ

時江 黙れ

仁科 低俗だ、あんたは低俗だ

時江 低俗よ、私は心底、低俗よ

仁科 ……

時江 オイ、低俗のどこが悪い、言っでご覧な

仁科、まわりを見回して

仁科 ほら皆さん、聞きました？ 女なんて碌なものじゃない。逃げなさい、退却だ。そうじゃなきゃ、生き血を吸われてお陀仏しますよ

仁科、ふらふらと出て行く

時江 なんなのあれ

高岡 彼にとつちや手塚さんは命よりも大切な人だから、ショックを受けたのだからよ、君と死のうとするなんて

時江 まさか嫉妬されたの？私

高岡 かもしれないね

時江 オエだわ。ねえ、ボクちゃん、タバコ、タバコくんない

高岡 もう寝ているよ

時江 あ、そうか。じゃ、あなた、出しな

高岡 (苦笑) ほんとに、吸い取られるな

高岡、タバコを出して、火をつけてやる

時江 ねえ、アレも出してよ

高岡 アレはさすがにまだまずいだろ

時江 まずかないわよ。ほら出しな

高岡 ヒロポンはないんだ、ゼドリンならあるけど

時江 ゼドリン？

高岡 うん、ヒロポンよりもいらしいから、最近、私はもっぱらコレさ

時江 あら錠剤？ きくのかしら

泉 僕もいいですか？

高岡 そんなにあったかな

高岡、財布の中をさがして

高岡 ああ、ちようど三つあった

泉 じゃお水を

時江 お酒でいいわよ

泉、ウイスキーとグラスを三つ持ってくる

時江 泉さん、そこんこの棚にさ、ビタミンBのアンプルと救心があるから、それも持ってきてよ

高岡 (苦笑) 君、信じてるのかい？ ヒロポン、ビタミンB、救心って三種の神器

時江 だって、これやっときゃ中毒にならないってもっぱらよ

高岡 どうだか

三人はウイスキーで薬を飲み
時江はビタミンBを腕に注射し、救心を飲む

高岡 でも君、なっちゃってるじゃないか中毒

時江 あら、私が中毒なのはアドルムよ

高岡 ヒロポンやって覚醒しといて、アドルム飲んで睡眠したいなんて、なんだかワガママだなあ

時江 ワガママなのよ。それにあなた知ってる？ アドルムをやるとちよいとエロ

チツクになるの気分が

高岡 うん、聞いているよ

時江 やればいいのにあなたも

時江は高岡の股間をまさぐる

高岡

時江 おやんなさいな

ドアの音

ツネ子と朴、そして香川が後ろからついて帰ってくる

時江 あら、二人ともこんな時分までどこ行ってたの

ツネ子 わー、おねえさ〜ん

ツネ子は時江に飛びつく

ツネ子 あのね、うなぎごちそうになったの、それから河原でダンスをしたの

香川 すみません、なかなかやめてくれないものだから、こんなに遅くなっちゃって
って

時江 あら、どうも、青年くん

香川 お帰りなさい（改まって）ご無事で何よりです

時江 ……ありがとう

ツネ子 おいしかったよう、うなぎ〜

時江 そりゃよかったねえ

ツネ子 でもボクちゃんはさ、ダメだったのよ、うなぎ

時江 あら、ボクちゃん、うなぎキライ？

香川 焼けた皮がキライみたいで

朴、身体を硬くする

泉 なぜ？

香川 さあ

時江 震災よ

泉 え？

時江 あの震災の時にね、出たでしょデマ騒ぎ

高岡 ほら、朝鮮人が日本人を襲うという

泉 ……

時江 ボクちゃんち、すぐこの近くだったのよ

泉 ボクちゃん、……朴、そうか、気付かなかった

朴 ようしやないです

間

時江 そうね、ボクちゃんの親は焼かれたの。目の前でようしやなくね

泉 ……そう

時江 快気祝いやりましょうよ

高岡 今からかい？

時江 いいじゃない（泉に）ね、ほら注いでよ（香川に）あんたも飲んでいいから
さ

香川 あ、はい

香川、皆に注いで自分のグラスを取りにカウンターに向かう
そこでふと風呂敷の上のせてある原稿に気付く

泉はクスリがきいたのか、タバコに何本も火をつけ始める

高岡 泉さん、タバコ、付いてますよ

時江 （苦笑）わかりやすい効きかた

高岡と時江、笑う

香川 あの、これ

高岡 ああ、それは読まないでくれ

高岡、原稿を片付けようとするが、香川それを止めて

第三場

——次の日の昼過ぎ

高岡 香川
高岡 香川

おい君

これ、僕のです

え？

この原稿、僕のです。僕がこないだ手塚さんに預けたものです

暗転

香川は一人将棋をしている

朴は雨の匂いを感じ、また缶や瓶を置いている

ツネ子は『東京ラブソディー』を歌いながらわら半紙に何かを書いている

♪花咲き花散る 宵も 銀座の 柳の下で

待つは君ひとり 君ひとり 逢えば行く テイルーム

。 楽し都 恋の都 夢のパラダイスよ 花の東京

うつつに夢見る君よ 神田は思い出の街

いまもこの胸にこの胸に ニコライのかねも鳴る

。 楽し都 恋の都 夢のパラダイスよ 花の東京

明けても暮れても歌う ジャズの浅草行けば

恋の踊り子の踊り子の 黒子(ほくろ) さえ忘れぬ

。 楽し都 恋の都 夢のパラダイスよ 花の東京

夜更けにひととき寄せて なまめく新宿えきの

あのこはダンサーかダンサーか 気にかかるあの指輪

。 楽し都 恋の都 夢のパラダイスよ 花の東京

香川 ツネ子さん、何を書いているの

ツネ子 お名前

香川 お名前？

ツネ子 ツネ子って(紙を見せ) ほらね

香川 あなた…、字が書けるんだ

ツネ子 失礼ねえ、こうみえてツネ子偉いのよ。なかなか良いトコロのお嬢様よ
すみません

香川 あら、ツネ子が嘘言ってると思ってるらっしやる？

ツネ子 そんなことは

香川 しょうがないなあ、じゃあボクちゃん、あれ、聞かせてあげようか

朴 ハイッ

ツネ子 聞きたいでしょ

香川 (なんのことかわからず) ええ、まあ

ツネ子 じゃあ、しょうがない

ツネ子、女優ぶって

ツネ子 私、ドロンよ
香川 ドロン
ツネ子 病院からドロンしたの高岡さんと
香川 ……？
ツネ子 だから、ここの病院

ツネ子、自分の頭をさして

ツネ子 キチガイ病院

香川 ……

ツネ子 ね、あなた入ったことある？ キチガイ病院

香川 いえ、僕は…

ツネ子 そう、よかったわね。だってね、あそこはくらくらくてくさくさしいの。ツネ子ね、いゃんなっちゃって、何度も何度も死のうとしたのよ、ほら

ツネ子、自分の手首をみせる、そこには沢山の傷跡

ツネ子 ここを切るとね、死ぬるんだってあなた知っていて？

香川 ……ええ、まあ

ツネ子 だけどツネ子、ヘタクソでね、全然死ねないの。あなた死ぬる？

香川 ……

ツネ子 それでね、そこにね、高岡さんがいらしたの。私ね、すぐにわかったの、このヒトが救って下さるって

香川 ……

ツネ子 それでね『助けて下さい。ここから出してください』って小さな声でお願いしたの。そしたら高岡さん、私の目をじゅっとご覧になって『いいよ』って言うて下さったの。そしてね、マントをこう…私にかぶせて下さって、そのまま、ドロンよ

香川 それで、ドロンか

ツネ子 (嬉しそうに) そうよ、そうなの、ドロンなのドロン

香川 そう

ツネ子 それでね、ここにつれてきて下さったの。ここなら安心だよって

香川 ……

ツネ子 だからね、ツネ子ね、高岡さん、だ〜〜いすき。だから、高岡さん見ると、すぐ、ここんところがジ〜〜んと熱くなっちゃうの

香川 ……

ツネ子 だけど、全然つれないんだあ高岡さん、つまんないの

ツネ子、香川の目を覗き込む

香川 あの、ツネ子さん……？

ツネ子 香川さんの目、みてあげる

香川 ……

ツネ子 高岡さんがね、目をみればいろんなコト、わかるって

香川、ツネ子がどんだん顔を近づけてくるので、ドギマギする

ドアの音がして、香川、ツネ子から飛びのく

高岡と時江が帰ってくる

高岡 おや、お邪魔だったかな？

ツネ子 わーい、高岡さん、わーい

高岡はツネ子を抱きしめる

時江 (香川に) お留守番どうも

香川 いえ

時江 助かったわ、ありがとう

香川 いえ

高岡 しかし、いきなり人の家におしかけて「風呂貸してくれ」なんて豪傑、君のほかにはいないね

時江 やめて下さるそんな言い方、私だって仕方なく

時江、暑そうに汗をぬぐう

高岡 ツネ子、ほら、あっちにいておいで

ツネ子、またわら半紙に文字を書き出す

時江 別に入りたくもなかったけどさ、気味悪いからさ、身体が

高岡 ?

時江 だって私、心中した男の奥さんと、枕並べたのよ昨日

高岡 なるほど

時江 だからさ、なんだかさ、身体の奥の方がドロドロしちゃって

高岡 夜のうちに来ればよかったじゃないか
時江 いやよ、私の家はここだし、あそこは私の部屋だもの
高岡 変なトコ、子供になるんだね
時江 あの人、なんで来たのよ
高岡 呼ばれたらしいよ、手塚くんに
時江 ヤダヤダ、ますますオエだわ、ボクちゃん、塩

時江、朴から塩を受け取り、二階に向かってまく

時江 (朴に) あの人、まだ寝てるの？

朴 (頷く)

時江 強すぎたかな

高岡 君、飲ませたの？

時江 だってメソメソ泣いてるから、盛ってやったのよアドルムを

高岡 ひどいねえ

時江 ひどくないわよ、慈悲の心よ

高岡 そうかしら

時江 あなた何でついて来たのよ

高岡 ひどいね、送ってあげたのに

時江 新聞の人は野次馬ね

高岡 悪いかい？

時江 勝手におし

高岡、二階を見上げる

時江 へえ

高岡 なあに？

時江 二階に興味をお持ちですか

高岡 さて

時江 またドロンするおつもり？

ツネ子 高岡さん、またドロンするの？ ドロン？

高岡 うん、ドロンだよ

ツネ子 わくわい、ドロンだ。ドロンだ。ボクちゃん、ドローンしよ、ドローン

ツネ子、朴は「ドロン」「ドロン」といいながら店の外へと出て行く

時江 タダの人妻よ

高岡 僕はね、汚れたものを見つけたのがうまいんだ、あれは匂うよ
時江 あら、私も入ってる？

高岡 もちろん筆頭さ

時江 失礼ね

高岡 君は心底汚れていたからね

時江 私だって好きで汚れたんじゃないやありません

高岡 僕はさ、君の汚れを拭いてやるのが楽しくて

高岡、そつと時江にさわる

時江 悪趣味

高岡 慈悲の心だぜ

時江 人妻は面倒よ

高岡 面倒なのがいらいらしいよ

時江 (苦笑)ぶっちゃって

時江 でもいいかもね、あれできつと男好きよ

高岡 おや、そうなの

時江 匂うのよ

ツネ子と朴が「ドローン」「ドローン」といいながら店に帰ってくる

高岡 そうだ、忘れていた。おいでツネ子

ツネ子 はくい

高岡は鞆の中から紙袋を出し、中から髪飾りを出す

高岡 ほら、お土産だよ

ツネ子 わくい

ツネ子、髪飾りを自分の頭にあててみて

ツネ子 朴ちゃん、お着替え

朴 ハイッ

ツネ子と朴、店の奥に行く

高岡、ツネ子の背中を見ながら

高岡 君、あの子はよかったかい
香川 はっ？

高岡 ツネ子だよ、よかったかい
香川 えっ？ あ、えと、あの、その、あの

時江 (高岡に) 変態性欲者
高岡 そうかしら

時江 (香川に) あなた駄目よ、こんな低俗になっちゃあ
高岡 僕は低俗かい
時江 すこぶるね

高岡 (香川に) 君、どう思う？
香川 えと、あの

時江 ヤキモチ焼いちやって
高岡 焼いてやしないさ

時江 どこかに隠してしまえばいいのに、ツネ子
高岡 あの子はアレが好きなんだ、やめさせたら死んでしまうよ

時江 ……
高岡 それに皆も幸せだろう、あの子のおかげで

高岡、下腹部が少し、痛い様子

時江 痛むの？ 『名誉の負傷』

高岡 雨の気配がすると時々ね
時江 そう

高岡 しかしあの子は抱かれれば抱かれるほど清くなっていくね
時江 ……

高岡 どんどん手の届かない存在になっていく、僕は永遠に片思いかしら
時江 インポテンツの恋心って、しみつたれだわ

高岡 今日は絡むね
時江 死にかけてからね、なんでも言えるのさ
高岡 ……

時江 (香川をみて) あら、この坊やポカンとしてる。ごめんねオイテケボリ

高岡 時ちゃん
時江 なにさ

高岡 生き残った世界はどうだい
時江 日々変わらずつてトコかしら……そうだ(新聞をとり) ねえ、どんな風に
載ったのさ私たち

高岡 載ってない

時江 え？

高岡 載ってやしないよ何も

時江 なぜ

高岡 だって遺書が無かったんだもの

時江 嘘よ、あの人が書いていてよ。なんだかわからないけど、書いていたわよ

高岡 ココで

高岡 けれど実際無かったんだよ、だから載せようがない

香川が無精髭でヨレヨレの浴衣をきた男を支えながら入ってくる

——手塚である

時江 ……あら手塚センセ。お帰りなさい

手塚 只今帰りましたよ時ちゃん、あら高岡さん

高岡 やあ。…泉さんは？

手塚 椅子んとこで寝ていたから置いてきた

時江 まあひどい

手塚 どう元気？

時江 まあまあよ。あなたはダメね全然ね

手塚 (苦笑) ああ、全然さ…

高岡 大丈夫ですか、まだ寝ていればよかったのに

手塚 だって時ちゃんが帰っちゃったんだもの、僕だけなんて恥ずかしくっていら

れない

時江 (水を持ってきて) ほら

手塚 ありがとう。しかし時ちゃんはずいぶんシャンとしてるね。スゴイや

高岡 しょうがないですよ、あなたよりこの人の方がずっとクスリに強いから

手塚 へえそうなんですか？

時江 男っておしゃべりね

手塚 しかし高岡さん、このたびはすみません。時ちゃんをすみません

時江 私、別にこの人のものじゃなくってよ

高岡 そうですよ、この人は違う

手塚 さすが高岡さん懐が深い(時江に) おい君、もう死のうなんて考えちゃダメ

だけ

時江 あきれた。この人、ピカイチのバカだわ

手塚 バカは死ななきゃなおらないくってね

時江 ふん

手塚 で、なんですか高岡さん、時ちゃんがクスリに強いって

高岡 だって、この人は毎日強いの一やっているからね
手塚 あら、じゃあ、もしかして、死ぬのも初めてじゃあなかったの？
時江 前に一度ね、真似事だけど

時江、高岡をチラリと見る

手塚 そうか、だからか……。妙に段取りがいいと思った

時江 お粗末さま

手塚 じゃあ、何故死ねなかったのかしら

時江 あなたのクスリが弱すぎたのよ

手塚 なんだそうなの。時ちゃん、次回はちゃんどご教授賜りたいね

高岡 手塚さん、なんだか楽しそうですね

手塚 ええ楽しい気持ちです、なぜだか

高岡 生き残れて嬉しいと

手塚 さてどうかしら。死んでもよし、生きてもよしって気分ですよ、今は

手塚、新聞を見つけて

手塚 だってほら、これでさぞかし皆さんびっくりしたろうと。それを生きて見られるのも愉快でしょ

手塚、新聞を読み出す――が

手塚 あれれ、どこかしら

時江 残念、載ってやしないわよ

手塚 え？

時江 私たちのコト、ちっともさ

手塚 ころ、冗談ポイだぞ時ちゃん

時江 だって本当だもの

手塚、必死になって探すがやはり見つからない

手塚 オイオイ、ここは地獄かい？ 僕は実のところ死んでいるのかい？

時江 だって、あなた残さなかったでしょアレ

手塚 何をさ

時江 遺書よ、遺書

手塚 残したよ、何言ってるの時ちゃん

高岡　でも無かったんですよ。だからどうにも載せようがなかった。本当に死んで下されば記事くらいには出来たのですが

手塚　でも僕、渡しましたよツネちゃんに

高岡　ツネ子に？

手塚　仁科くんに渡してくれて、確かに…

時江　ツネ子じゃダメよ。…あの子、どこかにやっちゃまったんだわ

手塚　なんだよ、参ったな。大丈夫そうに見えたんだけどツネちゃん

時江　ドジね

手塚　高岡さん、僕、もう一度書きます遺書。覚えてますから全部。書いたら載っ

高岡　けて頂けませんか

手塚　しかしそれはどうでしょう

高岡　面白いと思いますよ断然

泉、やってくる

手塚　おお、いいところに来た、泉くん

泉　手塚、お前黙って帰っちゃ

手塚　泉くん、聞いておくれよ。災難だよ災難。ボクの遺書、載ってないんだよ

手塚、泉に新聞を投げる

手塚　マズツたよ、まったく

泉　…

手塚　だからね泉くん。皆さんアノこと何もご存知ないんだよ。ボクのペテン、何もご存知ないんだよ

香川　あのっ

手塚　なんだい？ 青年くん

香川　もう大丈夫なんです

手塚　何が

香川　だから、もういいんです

手塚　は？

香川　いえむしろ光栄なんです。だってボクのつたない作品を手塚さんのものにして頂けたんですから

手塚　…君、なに言ってるの？

香川　僕は嬉しいんです

手塚　？

香川　手塚さん、ありがとうございます

手塚、ワケがわからない様子でキョトンとしている

高岡 彼は許してくれました。あなたからも、礼をなさったほうがいいですよ
手塚 ……え？

高岡 手塚さん。とぼけてちゃいけない。もう知れているんです、彼の原稿をあなたが盗んだコトを

手塚、やっと思い出し笑い出す

手塚 あ、あれかあ、いやあすみません。すっかり忘れていた。そうだ、僕、君のを仁科くんに渡したんだった、あの時はただただ恥をかきたくて

香川 ……恥？

手塚 悪かったね。青年くん

香川 い、いえ

手塚 では仲直りの握手だ、握手

手塚、香川の手を振り回す

高岡 手塚さん、あなたわかっていてるのですか？ 彼が許してくれたから良かったものの本来なら

手塚 (笑いながら) すみません、高岡さん、すみません

手塚の笑いは止まらない

手塚 でもねえ、なんだかおかしくって。だって僕にとっちゃこんなの本当がちっぽけなちっぽけな盗みなんだから。なあ、泉くん

泉 ……

手塚 おい言えよ、僕の怪盗ルパンぶりをさ

泉 手塚

手塚 言えっしたら、ねえ

泉 ……

手塚 おい

泉 ……

手塚 お前、本当にズルだな

泉 傷つけるのが怖いんだ

手塚 誰をだい

泉 君、読んだのか
手塚 なに

泉 僕の…

手塚 あれ、そういや僕の沙紀ちゃんがいらないね。沙紀ちゃんはどこ？ 泉くん、どこかに隠したんじゃないか？

時江 あのヒト、二階で寝ていてよ

手塚 二階？なぜ？

時江 あなたと私が心中したと聞いてさ、ショックのあまり倒れたとさ

手塚 ……へえ

手塚、二階を見上げる

手塚 いるの、あそこに

手塚、時江が飲みかけていた酒をあおり、フラフラと二階に上がっていく
ツネ子、新しい髪飾りをつけて出てくる

高岡に嬉しそうに見せてから、カウンターに座り歌い出す

高岡 (深々と頭を下げて) 香川くん、本当にすみませんでした

香川 (驚いて) 高岡さん、やめてください

高岡 失礼なことばかり

香川 いえ、ほんとに…、もう

高岡、香川に彼のものだった原稿を持たせ

高岡 あなたの作品、悪くはない

香川 え？

高岡 でもまだまだ粗はある。これはこれとして何か新しいのを書いて下さい。もし面白ければ掲載しましょう

香川 ホントですか？

高岡 ええ

香川 僕、今書きかけているのがあるんです

高岡 ではそれを完成させたら、見せてください

香川 はい、ではっ

香川、意気揚々と去っていく

泉 彼、ものにはなりませんよ
高岡 知っています

時江 酷い人

高岡 いいじゃないですか、いつ死ぬともわからない若者だ

時江 あの子、余計に傷つくわよ

高岡 文士なんてヤツは本当にヤワだな

泉 お嫌いですか

高岡 ええ、嫌いです

時江 ボクちゃん、レモネード、持ってきてよ

ツネ子 わくわく、レモネードっ

朴 ハイッ

朴、裏の部屋にレモネードを取りに行く
と、二階から、女の叫び声が聞こえる
皆、上を見上げる

朴、レモネードを持って出てくる

女の叫び声

朴、ぼんやりと、ツネ子と時江を見る

女のあえぎ声

朴 オモニ？

時江 ボクちゃん、あれは違うわ

あえぎ声

朴はレモネードのお盆を落とし、二階へと向かう

朴 オモニ、オモニッ

時江 ボクちゃん、あれは違うわ、違うから

時江、朴を抱きしめる

朴は「オモニ」と叫びながら時江を突き放し、やがてガタガタと震えだす

間

時江 ……ボクちゃん、あれは違うの、違うから

ツネ子

ボクちゃん、アレは、お猿さんごっこだよ

ツネ子

朴、震えが止まらない

高岡

ボクちゃん、こないだお土産に持ってきたカリントウ、持ってきておくれ

ツネ子

ぼくちゃん

高岡

朴、ツネ子の笑顔を見て

高岡

ハイッ

高岡

朴、部屋の奥へと去る

高岡

……レモネードが台無しね

高岡

時江、床に落ちたレモネードのグラスを拾う

高岡

朴、カリントウを持って出てくる

高岡

うん、これこれ

高岡

高岡、カリントウを食べる

高岡

(ツネ子に) ほら (時江に) ほら、君も

ツネ子

わーい

高岡

ツネ子、高岡のそばにより、おいしそうにカリントウを食べる

高岡

(泉に) ツネ子がきてからよ、ボクちゃんの心が少しずつ開き出したのは

高岡

ツネ子、カリントウを持って、朴へと近づく

高岡

(朴に) あくくん

高岡

ツネ子、朴にカリントウを食べさせてやる

高岡

朴、うれしそうに、ボリボリとカリントウを食べる

高岡

雷が鳴る

ツネ子

ボクちゃん、おしっこ

朴、ツネ子を手洗いへと連れて行く

間

小さなあえぎ声が絶え間なく聞こえ始める

高岡、泉、時江は黙って、カリントウを食べる

——やや、大きなあえぎ声が聞こえる

時江 お盛んですこと

高岡 うん

時江、急に泣きそうになる

時江 どうしたんだろう私

間

時江 私、悔しいわ

高岡 そうか、悔しいか

時江 都合がいいのね、私

高岡 ……

時江 私、結局都合のいい女なのよ

高岡 そうかもしれないな

時江 ……仕返ししてくれる？

高岡 いいよ

時江 めちゃくちゃにしちゃってよ

高岡 いいよ

時江 しちゃってよ

時江、泣く

時江 あく、お腹すいた
高岡 え？

時江　ちよつと食べたたら、すいちやった
高岡　これだから女はすごい
時江　高岡さん、お寿司つれてってよ
高岡　まだ、生ものはまずいんじゃないかしら
時江　まずかないわよ、悪けりや吐きやいいんだわ
高岡　せつないね
時江　ツネちゃん、ボクちゃん、おいで

ツネ子と朴、出てくる

ツネ子　なあに
時江　お寿司行こう
ツネ子　ワくくくイツ、お寿司っ
朴　ハイッ

ツネ子と朴、出て行く

時江　ほら、泉さんも
泉　いや、僕はもう少しここにいろよ
時江　あらま、いたわね、ここにも変態
泉　そんなんじゃないさ
時江　ま、いいわ。じゃお留守番しときなさい。もし知らないお客がきたら、うんとまきあげてね
泉　そうするよ
時江　それと、手塚さんがおりてきたら、ぶつておいて
泉　うん、わかった
時江　ようしやなくよ
泉　いいよ
時江　じゃ、高岡さん
高岡　うん

二人は、出て行く

静寂——時が過ぎていく
雨の音がして部屋が暗くなる

静かに、沙紀が下りてくる

沙紀は店に誰もいないと思い、水を飲む
やがて、泉に気付き、驚く

泉 手塚くんは？

沙紀 寝てますの。さすつてもゆすつてもおきやしない

泉 そうですか

沙紀 私、本当に死んでしまったのかと怖くなって、そうしたら大きなイビキを
クスリですよまだ効いているんです。アレをやると皆、大イキビになる
沙紀 そうなんですか

沙紀、二階を見上げて

沙紀 でも、聞こえないものですね

泉 ええ

沙紀 なにも、聞こえないわ

泉 ええ

沙紀 聞こえない

沙紀、店を見回し

沙紀 皆さんは？

泉 時江さんがお寿司が食べたいと

沙紀 あら

泉 勇敢ですよ女のヒトはやはり。男よりずっと勇敢だ

沙紀 そうね、あの人はそうだわ、きっとそうだわ

泉 あなたもですよ

間

泉 僕のせいです

沙紀 ……

泉 手塚は読んだんです、僕があなたに出した手紙を

沙紀 ……

泉 それで、あんなことを

沙紀 ……

泉 すみません

沙紀 いえ

泉 すみません
沙紀 いえ、いいんです
泉 何か飲まれますか？ ソーダ水が何か
沙紀 ブランデーを少し
泉 おや
私だって飲みますのよ。…いけないかしら
泉 いえ、いいでしょう

泉、酒を注ぐ。沙紀の前に持ってくる
二人、会釈して酒を飲む

沙紀 おいしい
泉 それはよかった
沙紀 キレイな方
泉 え？

沙紀 時江さん
泉 ええまあ

沙紀 それに、とてもお優しいの
泉 優しいですよ、あれは
沙紀 二階でね、なんだか乱暴なふりをして、私をからかったりしてらっしゃった
けど、その実、とても暖かでした

泉 あれはそういう女です。だからいつも寂しいのです
沙紀 それに偉いわ、あの方、ここを一人で
泉 パトロンがいるんですよ

沙紀 いたって偉いわ。実質やっているのはあの方なのでしょう？
泉 まあ、ええ

沙紀 手塚が好きになるのもわかるわ
泉 ……
沙紀 私などはダメね、一人でなんて何もできない
泉 あなたほど彼女は強くない
沙紀 でもあの方が、選ばれたのですわ
泉 嫉妬ですか

間

沙紀 皆さん、まだ何もご存知ないのね
泉 ええ

間

泉 沙紀さん。今です。今が良い機会です

沙紀 やはり無理ですわ。あなたのお気持ちはとても…、でも私は

泉 あなたは、あなたとして、お書きになるべきだ

沙紀 そうでしょうか

泉 それにもうすぐにもおぼれますよ、こんなことを起こしたんだ

沙紀 ……

泉 あなたが言わなくても手塚が言う。手塚だってこうやって皆を集めたんだ、

沙紀 自分がもしも死んだらあなたを文壇に送り込む差配だったんですよ

泉 あの人はあなたほど、賢くありません

沙紀 僕は賢いですか

泉 ええ

沙紀、まっすぐに泉をみて

沙紀 お言葉をそのままお返ししますわ

泉 ……

沙紀 あなたが言わなければ、そして手塚が言わなければこのままで済みますの

泉 ……

沙紀 今まで通りになりますの

泉 しかし仁科がいずれ気付きます、仁科は手塚の編集者なんですから

沙紀 あの方は大丈夫です。ご存知だけれど大丈夫です

泉 (驚いて) 仁科は知っているんですか？

沙紀 (頷き) ええ

泉 それで言わないと？

沙紀 ええ、きつと

間

泉 では僕はどうすれば…

沙紀 ……

泉 あなたの才能の前に書けなくなってしまった僕は、どうすればいいんです

沙紀 か？

泉 あなたは私を買いかぶりすぎですわ

沙紀 いいえ、違う

泉は沙紀の腕をつかむ

沙紀 お放しになつて

泉 あなたは、あなたは、文学を冒流している

沙紀 そうかしら

泉 こんなこと続けていてはいけない。あなたのためにも、もちろん手塚のためにも

沙紀 そうかしら

泉 絶対によくありません、打ち明けるのです、何もかも

沙紀 あなたは、ずっとそればかりね

泉 何度でも言います

沙紀 なぜ

泉 なぜって、それが正義だからです

沙紀 男の方は、すぐ正義、正義とおっしゃるのね

泉 ……

沙紀 あなたは手塚が死んでもいいの

間

泉 ……ええ

沙紀 ではどなたが？ どなたがそんなに知りたいんですの？

泉 それは、なにより、なにより世間が

沙紀、小さく笑い出す

泉 沙紀さん……？

沙紀 世間ですって

泉 ……

沙紀 ずるいわ、そんな言い方、泉さん、あなたずるい方ね

沙紀、身をよじって笑う

泉、その沙紀を抱きしめる

泉 こうさせてください、お願いだ、一度だけ

沙紀、泉から逃げようともがき、二人、長椅子に倒れる

泉 あの日がいけないんだ。あの日。手塚を驚かしてやろうと、予告もなしに行
ったあの日

沙紀 ……

泉 いつもはしつかり鍵がかかっている門があいていた。僕は声をかけようと思
ったけれどやめました。手塚の後ろで一心不乱に原稿用紙に向かってい
るあなたの姿が見えたから

沙紀 ……

泉 私は最初、あなたが手塚の原稿を清書しているのだと思いました……いつも
のようにと。けれどわかったのです。手塚とあなたの顔を見ているうちわか
ったのです、わかってしまったのです

沙紀 ……

泉 書いているのは、あなただと

手塚がゆっくりと二階から降りてきて二人を見ている

泉 私は悩みました、悩んで悩んで悩みぬきました。手塚は僕の友です、親友で
す。あの才能を僕はずっと追いかけてここまで来たんです

沙紀 ……

泉 だから僕は手紙を書きました。あなたに手紙を書きました

沙紀 ……

泉 そして、あなたに会いました。会ってしまいました

沙紀 ……

泉 お願いだ沙紀さん、本当のことをみんなに言って下さい。僕にあなたの批評
をさせて下さい

沙紀 ……

泉 沙紀さん

沙紀 ……

泉 お願いだ

泉、沙紀の着物をはだける

手塚 沙紀を手箒めにするつもりかい

泉 手塚

手塚 聖人君子くんも、とうとう退廃の道へと進むんだ、いや、おめでとう

泉 ……

手塚 だけど可愛そうに。この女にどんなに焦うても無駄さ。沙紀はね、心底僕

が好きなのさ。僕の胸、僕の腹、僕の…（笑）

泉

…

手塚

…

泉

やだなあ、きつと皆、あれは僕が仕掛けたと思っただろうなあ

手塚

…

手塚

でも残念ながら沙紀だよ。しかけたのは沙紀だ。こいつが僕に乗った。死にかけてボロボロの僕に

泉

沙紀さん、聞いちゃいけない

手塚

沙紀、言っでご覧な、本当だと言っでご覧な

泉、手塚を殴る

手塚

着物めくって、乗っかってきたんだよな沙紀

泉

沙紀さん逃げなさい、こんな卑怯なヤツからお逃げなさい、一刻も早くお逃げなさい

手塚

なに言ってるの、君だって同じだろ。たいそうご立派な御託並べていたけれど、その実、ただただ、この女に乗っかったただけなんだろう？

泉

黙れ

手塚

泉くん、君は今すごく感じていたんだろねえ。ね？ そうだろう？ ほら、どうだい？ え？

手塚は泉を触ろうとするが、泉にまた殴られる

沙紀、手塚の傍に走り寄り、彼を守るかのように手を広げる

沙紀

（泉に）やめて

泉

…

手塚、大笑いし

手塚

ツネちゃんの言うとおりだなあ。ほんとにサルだ、僕たちはサル山のサルだ、盛りのついたおサルさん、ほれ、ウッキッキ

手塚、泉に抱きつく

泉

やめろっ

泉、手塚を突き飛ばす
手塚、カウンターにぶつかる

手塚
イタタ、おい君、僕は死にかけてた親友だぞ、手加減しろよ

泉、殴ろうとするのを沙紀がまたとめる
その沙紀を羽交い絞めにする手塚

手塚
仕方ないなあ、じゃあ、もう少しわかりやすく教えるよ、このヒトの本当の姿をね

手塚は沙紀を乱暴にカウンターへと押し付け、カウンターの中からナイフを
探し出し、彼女の体にあてる

泉
手塚っ
近づくともずいよ、近づくとも刺してしまうからね。僕はこういうのはとても
不器用だから、きつと、深く深く刺してしまうよ

手塚、沙紀を愛撫する
沙紀、小さく声をあげる

手塚
やだなあ沙紀ちゃん、君こんな風でも感じるの？

沙紀
(あえぐ)

泉
やめろ

泉くん、君は僕の親友だ。だからさ、わかってほしいんだ、わかってほしい
んだよ。このヒトは怖いヒトなんだ、本当に沙紀は怖いヒトなんだ

ドアの音

高岡が入ってくる——三人の様子をみて

高岡
馬鹿だね私も、財布を忘れてしまつて……なんだか、面白そうなことをし
ていますね

手塚
そうなんですよ高岡さん、今からそりや面白いコトになりますよ。ひとつ
見ていかれませんか？

高岡
手塚
どうかしら、女性を待たせているものでね。すぐに終わりますか？
終わりますよ。こういう狂言は飽きられないうちに終わらせなくちゃつま
らない

高岡 じゃあひとつ見せて頂くかな。御代は幾らですか？
手塚 それはご覧になってからで

高岡、ゆっくりと蓄音機のレバーを回し、レコードをかける
——ワルツがかかる

手塚 (笑) あなたも酔狂な方だなあ

泉 高岡さん、あいつ、ナイフを

高岡 ええ

泉 高岡さん

高岡 騒ぎなさんな、騒ぐと彼、本当に刺しますよ。あれは本当に刺す目です

泉 ……

高岡 それに泉さん、いいですか？、あれは夫婦なんですよ。夫婦の痴話喧嘩です
(手塚に) あの、痴話喧嘩ごときだとたいした木戸銭は出せないけれどいい
ですか？

手塚 そうか。じゃあストーリーをお見せしなくてはね

高岡 期待してます

手塚 大丈夫、僕は流行作家ですよ

手塚、沙紀の体をまさぐり、沙紀はあえぐ

泉 やめろ手塚、お願いだ、やめてくれ

手塚 やめないさ

泉 手塚

手塚 僕は今、沙紀に仕返しをしてるんだ。仕返しをね

手塚 やめて

沙紀、僕も言ったよね、君に言ったよね、何度も何度も。やめてくれ、やめ
てくれ、やめてくれ、やめてくれ、やめてくれ

手塚 ……

手塚 でも君はやめなかった、やめてくれなかった、なぜだい沙紀

手塚 ……

手塚 沙紀っ

手塚 やめたく、なかった

手塚 僕が破滅するとわかっていても？

手塚 ……

手塚 そうだ、高岡さんをご存知ないですよ

手塚 高岡

手塚 高岡さん、僕の本は

沙紀 やめて

手塚 高岡さん、僕の本はね

沙紀 やめて

手塚 僕の本はねえ『ブリキの絵草子』からこっち、すべてこの沙紀の書いたものなんです

間

高岡 それは興味深い。なるほどそうか、それであなたは怪盗ルパンと
手塚 そうですそう

高岡 (泉に) ご存知だったのですね

泉 ……

手塚 こいつは知っていたんです、知っていて言わないでおいでくれたんです。優しいでしょう？ 沙紀への手紙にそう書いてありました

泉 ……

手塚 この男、沙紀に惚れているんですよ。僕のかわいい奥さんにね(笑) 高岡さん、しかしこいつの手紙つたらないですよ、三文小説以下だ

泉 手塚

手塚 恥ずかしがるこたあないじゃないか。ええとなんだっけ。純愛ですか？ あなたの才能にひれ伏します？ 僕はもうあなたなしでは生きられない？ (笑)

高岡 泉くん君さ、今度本格的なコメディでも書けよ

手塚 ある日ね、高岡さん。沙紀が自分で書いたという短編を僕のところを持って

高岡 きたんです。読んでくれとね。沙紀、あの時、僕笑ったよね

沙紀 ……

手塚 でも、本当のところは殴ってやろうかしらと思っただよ。だってそうだろう？ 女房が夫の仕事の真似をするなんて。だけど僕はさ、とっても優しい僕はさ、とても度量があったから、君のを世に出してあげようなんて考えちゃったんだ

高岡 しかしなぜ、あなたの名前で

手塚 だって高岡さん。僕の名前ならすぐに世に出せたんだもの

高岡 ……

手塚 ほんの遊びのつもりだった。ほんの記念にね。だってアレはちよつとした短いものだったし、どうということはないと思っただから

高岡 しかし、それに大層な評価がついてしまった

手塚 そうなんです。笑っちゃいました『手塚の新境地』なんて言われてね、賞

なんかも頂いちゃってね。ニヤニヤしながら授賞式出ましたよ

なぜそこで止めなかったのですか？一作だけならまだ取り返しがついたのにそこからがこの人のワナだったんですよ高岡さん。この人ったら、すぐに次を書いちゃったんだもの。そして、また次、またその次と、止め処もなく、どんどん、どんどん……

(沙紀に) むごいねあなたも。彼がどうなるかはわかっていたらうに

……

さすが高岡さん。そうなんですよ、お察しの通り、僕はすっかり書けなくなっちゃまったんです。だからもう後には引き返せなくなっちゃまったんです

……

僕は、本も書けない。死ぬコトも出来ない。この女に独占されたまま、気がふれるんだ

(あえぐ)

そうだ。それならいっそ、そうだよ、今死のう、二人で死のう。ねえ高岡さん、これなら高く売れますよね

手塚、沙紀を抱きしめる

手塚
ねえ、沙紀、最後に教えておくれよ。僕は、僕の新作の題名を見ずにきちや
ったんだ

……

なんて題なの、教えてよ

……

どんな内容なの、教えてよ

言うわ

言うておくれ

言うわ

沙紀から手塚を抱きしめる、耳元でささやく

手塚
そう、そうか、なるほど、そうか

——二人は二人だけの世界で果てる
手塚、ナイフを下ろす

泉がナイフを持つ

高岡 泉さん、もう幕は下りましたよ

沙紀、泉をまっすぐ見る

沙紀 刺して

泉 ……

沙紀 刺してください

泉 ……

沙紀 死なせて

泉 ……

沙紀 私たちを死なせて、お願い

間

泉 君は

沙紀 ……

泉 醜悪だ

泉、ナイフをゆっくりとカウンターに置き、出て行く

高岡、拍手をする

高岡 いや面白かった、最後までまあ、うん、良かったな

財布を沙紀と手塚の前に投げる高岡

高岡 それでね、オマケがほしいんですが

手塚 オマケ？

高岡 沙紀さんをつけて下さい、いいでしょう？

手塚、投げられた財布を見つめる

手塚 ああ、いいよ

手塚はよろよるとその財布をひろい、外に出て行く

高岡は捨てられた沙紀を見つめる

やがて、とまっていたレコードをもう一度かけ、沙紀を導く

第四場

朝になる

——二人、ゆっくりと踊る

暗転

時江が雨だれが入った缶をのぞいている
カウンターの上にはナイフ
彼女はそれを手にとるがカウンターの中へとしま
う
そして——水を飲む

朴とツネ子がでてきてカフェの窓をあける
——太陽の光が店の中へと流れる

時江 おはよう

ツネ子 おねえさん、おはよう

時江 今日も暑くなりそうねえ

ツネ子 ボクちゃん

朴 ハイッ

ツネ子、朴を踏み台にしてカウンターに座り、歌を歌いだす

『丘を越えて』

♪丘を越えて 行こうよ

真澄の空は 朗らかに晴れて 楽しい心
鳴るは胸の血潮よ 讃えよ わが青春を
いざ行け 遥か希望の 丘を越えて

丘を越えて 行こうよ

小春の空は 麗らかに澄みて 嬉しい心

湧くは胸の泉よ 讃えよ わが青春(こ)を

いざ聞け 遠く希望の 鐘は鳴るよ

時江、机の上に残っていたカリントウを見つけ、食べる

時江 ……しけってる

帰り支度した沙紀が二階から降りてくる

——彼女は時江から借りた「洋服」を着ている

ツネ子

いくねえ

時江 初めてのわりには意外と似合うじゃない、お洋服

沙紀 ……これ、本当にお借りしても

時江 あんな汚れた着物きてこの辺りうろつかれたら「立ちんぼ」だと思われちゃうわよ

沙紀 すみません

時江 戻ってこなかったわね、手塚さん

沙紀 ええ

時江 ……

沙紀 あの、二晩もお世話になりました。失礼します

沙紀、帰ろうとする

時江 ねえ、ちよつとだけいいかしら

沙紀 ……

時江 いいじゃない、きつともう二度と会わないんでしょうから。ボクちゃん、お茶、頂戴な

時江、沙紀にカリンントウを差し出す

時江 どうぞ

沙紀、カリンントウを手取る

時江 高岡さん、どうだった？

沙紀 ……

時江 ずばりよ、どうだった？

沙紀 ……
(首を振る)

時江 そうか、あなたでもダメか、ちよつぱり期待していたんだけれどすみません

沙紀 あやまるこたあないわよ。やっぱり、あの傷のせいなのかしら

朴、お茶を沙紀に出す

沙紀 ありがとう

朴 ハイッ

朴、沙紀にニッコリと微笑む

時江 あら、ツネちゃん以外にクチ聞いた、珍しい

朴

(恥ずかしそうに) ハイッ

ツネ子の歌声が店に響く

沙紀

あの傷、ツネ子さんにつけられたって

時江

(噴出し) あの人、そんな話にしたの? それ、嘘よ。いや、ホントかな

沙紀

……?

時江

許婚だったのよ、あの二人

沙紀

……えっ

時江

けれどあの大恐慌でね、株で大損してツネちゃんちは破産。ツネちゃん方は行方知れずになっちゃった。高岡さん、必死になって捜したけれど見つからず、自棄起こして満州へ。それであの「名誉の負傷」よ

沙紀

……それで、あの傷

時江

そ。でね。傷の手当てで入った病院で、愛しのツネちゃんのご対面よ。外地に売られ、ボロボロにされて気がふれたかつての恋人とね(苦笑) まったく因果だよ

沙紀

……

時江

その頃って世間じゃ「庶民のヒーロー」なんて騒がれていたけれど、真実なんてこんなものさ

沙紀

……

時江

高岡さん、ツネちゃんを連れ帰って元に戻そうとしたけれど記憶は戻らず、淫乱だけが残っちゃった

沙紀

……

時江

女のカラダって、キリがないよね

ツネ子

おねえさくん、今、すごい車が通ったよ、ピッカピカなの

時江

よかったねえ。……気が触れただけ幸せよ

沙紀

そうね

時江

高岡さんは、ずっと、ツネちゃんのモノよ

沙紀

うらやましいわ

時江、笑ってしまう

時江

あなたって、性悪ね

沙紀

……え

時江

あなたみたいなのに甘い幻想を抱いてき、男はみんな、めくらだわ

沙紀

あなたは優しすぎるのね

時江

弱虫なのよ

第五場

沙紀 うらやましいわ
時江 わくわく、また出た

沙紀 (笑)

時江 あんた、稼げる女給になるのにな
沙紀 だめよ、心底、賢くないから
時江 それ、いやみ？

沙紀 (首をふる)

仁科が入ってくる

仁科 なんだ、沙紀さん、ここにいたの。まだ、ここにいたんだ、探しちゃったよ
仁科さん？

時江 時江さん、俺、汚れちゃった、汚れちゃったよ
え？

仁科 俺さ、情けないんだよ、だって俺さあ、この汚い女を抱いちゃったんだよ。
その目でさ、その目で俺をじっと見ながら「誰にも言わないで、お願いよ」
なんて甘い声出しやがって。だから俺、だからつい……、つい抱いちゃまった
んだよ

ツネ子 お猿さんごっこ？

仁科 あんたが、いなきやよかったんだ。あんたがいなきや

沙紀 ……

仁科 ねえ、あんたがいなきや、手塚さんは戻ってくるよね

沙紀 ……

仁科 戻してくれよ、手塚さんを

ツネ子 お猿さんごっこ？ ツネ子もませて

仁科 そうだよツネちゃん、お猿さんごっこさ、それでね、お遊びはこうやって終
わるんだ

仁科、鞆の中から包丁を出し、沙紀へと向かう

暗転

——数週間後、初秋、夕刻、雨
雨粒がポツリポツリと落ちていく

店にはラジオが置かれ、番組が流れている

泉と香川が将棋をしている

朴とツネ子はやちよりをしている

香川 泉さん、なかなか、勉強してきましたね

泉 負けてばかりだからね、今日こそは勝ちたいんだ

香川 受けて立ちますよ

二人、将棋に集中する

香川 結局、あの人の勝ちですね

泉 ……え？

香川 高岡さん

泉 ……ああ

香川 東新聞に手塚さんの連載が始まってからこっち、すごい反響だって聞きました。なんたって何もかももの独占だもの。またひと財産作るんでしょうね、あの人の

香川、ラジオを消して

香川 ツネちゃん、お歌、歌ってよ

ツネ子 うん

香川 ラジオより、ツネちゃんのお歌がいいや

ツネ子 (うれしそうに) うん

ツネ子は額に皺をよせ「君が代」を歌う

♪君が代は ちよにやちよにさざれ

いしの 巖となりて

香川と泉、顔を見合わせ

香川 ……あの、ツネちゃん、別の曲をお願いします

ツネ子 ハイッ

『うちの女房にや髭がある』

何か言おうと思っても 女房にや何だか 言えません

そこでついつい 嘘を言う

台詞「なんです あなた」 台詞「いや別に 僕は その あの」
パピプペ パピプペ パピプペポ うちの女房にや 髭がある

朝の出がけの 挨拶も 格子を開けての

只今も なんだかビクビク 気がひける

台詞「なんです あなた」 台詞「いや別に 僕は その あの」
パピプペ パピプペ パピプペポ うちの女房にや 髭がある

姿やさしく 美しく どこがこわいか わからない

ここかあそこか わからない

台詞「なんです あなた」 台詞「いや別に 僕は その あの」
パピプペ パピプペ パピプペポ うちの女房にや 髭がある

地震 雷 火事 親父 そいつは昔の ことですよ

今じゃ女房が 苦手だね

台詞「なんです あなた」 台詞「いや別に 僕は その あの」
パピプペ パピプペ パピプペポ うちの女房にや 髭がある

泉さんは読みましたか？

いや、まだ読んでない

いいですよ、すごく。ほんとにいいです
だろうね

こう、色々な事実を克明に繊細に描いていて、でも決してルポルタージュに
はならず…、僕、わかりました。これぞ、本物の手塚文学なんだって
そう

だって読んでいて震えましたから。あれ、芥川とかとちやうんじやないか
な？ これでもう、誰も何も言わなくなりませよ

…

それに僕もちよこつと出てきたから嬉しくて。…いや、泉さんほどじゃない
ですけれど。

…

あの、記者達はまだやってきますか？

まあ、ボチボチかな。だいぶん引けたよ

泉さんは、いつ書くんですか？

さてね、いつになるやら

書いたら載せるといわれてるんだから書いてください

香川

泉

香川

泉

香川

泉

香川

泉

香川

泉

香川

泉

香川

泉

香川

泉 そうだね

香川 贅沢ですよ。だって僕なんか、いくら書いても門前払いなんだもの

泉 (苦笑) しかし、あきらめないね君も

香川 あきらめませんよ勝つまでは

泉 スゴイ、スゴイ…… (駒を動かす) よし、これでどうだ

香川 ハイ、王手

泉 え？

香川 王手です

泉 あれ？ これがどうしてここにきたの？ ここにきた時期がわからない

香川 集中を欠いていたからですよ

泉 まいったなあ、君、本当に強いねえ

香川 泉さんって、まっすぐな……

香川、急に神妙になる

泉 どうしたの

香川 いや、なんかあの時とそっくりだから

泉 え？

香川 あの日、仁科さんと僕将棋指していて…、今みたいに色々話しながら

泉 そう

香川 仁科さんの居場所は？

泉 わからんらしいよ

香川 手塚さん、訴えなかったんですね

泉 うん

香川 泉さん

泉 ん？

香川 沙紀さんに会いましたか？

泉 いや

香川 そうですか

泉 うん

香川 身体がもう、動かないって本当ですか？

泉 らしいよ、脊椎をやられたからね

香川 手塚さんが、ずっと世話を？

泉 ああ、真摯にやっていると聞いたよ

ツネ子 ボクちゃん、レコード

朴 ハイッ

朴はレコードをかける

ワルツがかかる——三場で高岡がかけた曲と同じなので、泉はたじろぐ

ツネ子
ボクちゃん、おどろ

朴
ハイッ

ツネちゃんと朴はたどたどしく踊り出す

香川
……泉さん

泉
……

香川
泉さん

泉
え？

香川
大丈夫ですか

泉
大丈夫だよ、けれど、もう少し考えさせてくれ

香川
いえ、将棋じゃなくて

泉
……

香川
大丈夫ですか

泉
うん

香川
ホントですか

泉
ああ

香川
……

泉
だって、僕は…僕は、結局

香川
……

泉
僕は……

香川
……

泉
僕は、ずるい男だから

香川
じゃ、待ったはなしです

泉
そうか

香川
そうです

高岡入ってくる

ツネ子
わーい、高岡さんだ、わーい

時江が降りてくる。彼女は化粧をし、店着の着物を着ている

時江
あら、お久しぶり

高岡 ほら、ツネ子、お土産だよ

高岡、ツネ子に髪飾りを渡す

ツネ子 わーい。ボクちゃん、お着替え

朴 ハイッ

ツネ子と朴、奥の部屋へといく

高岡 おや、しつこい青年くんか。さつさとあきらめてくれないかな

香川 (おどおどしながら) あ、あきらめません、何度でも送りつけてやります

高岡 やれやれ、読ませられるほうの身になってごらんよ(泉に) どうです

泉 やられてますよ、相変わらず

高岡 君さ、将棋で食べばいいのに

香川 個人の自由です

高岡 (苦笑)

泉 高岡さん、支那がひどいって本当ですか

高岡 ええ、相当の戦死者が出ているらしい、新聞には載せられないけれど

香川、じーっと高岡をみる

高岡 ダメダメ、そんな目をしたって君のは載せられない

香川 僕、来年入隊して支那に行くんです。死ぬかもしれない男に温情を

高岡 芸術に温情なんてないよ

香川 冷たいなあ

泉 くじにはずれて、予備になることを祈れよ

香川 シッ、怒られますよ

高岡 (時江に) ほら、カレントウ

時江 いらない

高岡 なんだよ、好きだって言ったくせに

時江 ……

高岡 約束、守ったろ?

時江 ……

高岡 めちゃくちゃにしてやったよ

時江 する相手が違うわよ、バカ

高岡 え?

時江 男はみんなバカね

高岡

なに？

時江

あなたさ、一人勝ちしたと思ってるでしょう

高岡

違うのかい？

時江

一人勝ちしたのは沙紀さんよ

高岡

……

時江

(身震いして)おおコワ、囚われたかわいそうな手塚さん

高岡

……

時江

ツネちゃんに囚われてる、あなたと同じよ

仁科がやってくる——彼は兵隊の格好をしている

高岡

仁科くん

仁科

(敬礼して)ご無沙汰しております

泉

……

仁科

本日、支那に旅立つコトになりましたので、皆様にご挨拶をと

高岡

そうか

仁科

その切はいろいろとご迷惑をおかけいたしました

泉

……

仁科

仁科三郎、お国の為に戦ってまいります

泉

仁科くん

ツネ子と朴、出てくる

朴、仁科の格好をみて怯え、ツネ子の後ろに隠れる

泉

生きて帰ってこいよ

仁科、泉の胸倉をつかむ

仁科

きさまっ、何を言うか

高岡

仁科くん

死ぬ気で戦うんだ。帰ってなどこなくてもいい、いいんだ

仁科

ツネ子泣き出す

ツネ子

クライ、兵隊さん

仁科

ツネちゃん、僕は君たちのために戦うんだよ

ツネ子

クライ、兵隊さん

仁科 泉さん、僕はわかりました。やっと分かりました。語り合ってたって無駄なんです。ペンじゃ、ヒトは救えない。文学なんてクソ食らえだ
……
仁科 僕はね泉さん、もうそんなひ弱な手はいらない

敬礼する仁科、去る
遠くで仁科三郎くん、バンザーイ、バンザーイ……と続いていく
だんだんと大勢の足音が近づいてくる
残った人々の周りに恐怖が広がる
ツネ子は震えている朴をやさしく抱き起こし

ツネ子 ボクちゃん、おどろ
朴 ハイッ

ツネ子、ほかのレコードを出し

ツネ子 これかけて
朴 ハイッ

朴、レコードをかける——ゆっくりと、朴とツネ子は踊りだす

香川 泉さん
泉 ん
香川 僕の初めてはツネちゃんできったです
泉 そう
香川 だって、あの人は、天使だもの
泉 ……
香川 っつて、仁科さんの受け売りだけど
泉 うん

皆、ツネ子と朴の踊る姿をじっと見つめる

《終》

※二〇一〇年七月二十三日〜八月一日までザムザ阿佐ヶ谷にて公演

G-up presents 『猿』

■スタッフ■

作 秋之桜子

演出 寺十吾

舞台美術 加藤ちか

舞台監督 金安遼平

音響 岩野直人

照明 阿部康子

衣装 上岡紘子

プロデューサー 赤沼かがみ

企画制作 G-up

■キャスト■

ボクちゃん・・・山ノ井史 (studio salt)

仁科・・・有川マコト (絶対王様)

泉・・・有馬自由 (扉座)

香川・・・西原誠吾 (パラドックス定数)

ツネちゃん・・・三嶋絵里子 (ラッパ屋)

高岡・・・細見大輔

沙紀・・・柿丸美智恵 (毛皮族)

時江・・・山像かおり (文学座)

手塚・・・朝倉伸二